

# 演奏者

♪パートトップ

## 第1ヴァイオリン

大野 愛  
後藤 信也  
佐藤 郁子  
林 秀樹  
三木 聡一郎  
宮川 朋広  
♪山本 信彦  
小林 菜 (賛助)  
鹿田 玄輝 (賛助)  
田中 美保 (賛助)  
中島 由恵 (賛助)  
細淵 淨二 (賛助)  
横山 和可子 (賛助)  
吉田 弘幸 (賛助)

## 第2ヴァイオリン

榎本 学  
♪小島 暁子  
高橋 由紀  
富山 直美  
中山 典子  
林 昌英  
福田 久美子  
宮島 史英  
内山 秀文 (賛助)  
大月 彬子 (賛助)  
渡辺 陽子 (賛助)

## ヴィオラ

相川 美佐子  
鹿田 澄子  
♪友末 洋一  
内藤 真紀子  
舟曳 千冬  
安田 浩子  
上井 真 (賛助)  
柿沼 颯太 (賛助)

## チェロ

今井 悠太  
岩下 泰久  
♪高原 あゆみ  
豊田 千織  
豊田 真広  
中谷 奉子  
川原 佑介 (賛助)  
小山 裕隆 (賛助)

## コントラバス

井上 望  
小島 大介  
柳町 弘毅  
♪山崎 歩  
山田 啓太 (賛助)

## フルート

白崎 哲哉  
辻 悠子  
♪宮本 英俊  
山内 久美子  
山下 菜摘

## オーボエ

青柳 安紀  
古田 綾子  
♪野村 隆浩  
楠原 千佳子 (賛助)

## クラリネット

♪相川 大輔  
古西 章子  
百元 朝子  
三村 好美 (賛助)

## ファゴット

栗原 治男  
二上 義幸  
♪藤田 高  
藤村 伸夫

## ホルン

伊藤 正  
佐久間 絵理子  
柴田 真砂男  
二宮 一敏  
バジル・クリツァー  
樋口 愛美  
♪南 朋子

## トランペット

石林 浩樹  
♪伊豫田 望  
横原 康二 (賛助)

指揮 松尾 葉子

サクソフォン 上野 耕平

## トロンボーン&チューバ

植松 喜孝  
関根 一臣  
♪高橋 正積  
北岡 寛司 (賛助)

## パーカッション

♪河竹 千春  
近藤 正芳  
野村 万季  
小林 緑生 (賛助)  
竹林 佑花 (賛助)  
三浦 惇史 (賛助)  
森本 太郎 (賛助)

## チェレスタ

内藤 佳有 (賛助)

## ハープ

井上 美江子 (賛助)  
鈴木 明子 (賛助)

## 指導者 (50音順)

伊東 新之助  
遠藤 香奈子  
泉 貴圭  
加藤 智浩  
黒木 岩寿  
斎藤 和志  
榊 真由  
寺本 義明  
戸澤 哲夫  
橋本 晋哉  
(敬称略)

## 運営

団長 関根 一臣  
コンサートマスター 大野 愛

インスペクター 小島 暁子  
会計 三木 聡一郎  
ライブラリアン 山本 信彦  
録音 柴田 真砂男

ホームページ・ML 南 朋子  
会場 藤村 伸夫

## 選曲

関根 一臣  
藤村 伸夫  
舟曳 千冬  
柳町 弘毅

## 演奏会

委員長 宮川 朋広  
ステージマネージャー 本野 正  
会計 宮島 史英  
チケット 柳町 美香  
ステージ 二上 義幸  
プログラム・チラシ 古田 綾子  
広報 中谷 奉子  
記録・VTR 今井 悠太  
庶務 富山 直美  
中山 典子  
舟曳 千冬  
野村 隆浩  
催事

# Global Philharmonic Orchestra

グローバル・フィルハーモニック・オーケストラ



指揮  
松尾葉子  
Yoko Matsuo  
サクソフォン  
上野耕平  
Kohei Ueno

## 第74回 定期演奏会

2026  
**2.15**日

12:45開場 / 13:30開演

すみだトリフォニーホール  
大ホール

## PROGRAM

モーリス・ラヴェル  
道化師の朝の歌 / 亡き王女のためのパヴァーヌ  
Maurice Ravel Alborada del gracioso / Pavane pour une infante défunte

アンリ・トマジ  
サクソフォン協奏曲 サクソフォン独奏: 上野耕平  
Henri Tomasi Concerto pour saxophone alto et orchestre

ジョルジュ・ビゼー  
「カルメン」組曲より抜粋  
Georges Bizet Extraits de la suite《Carmen》

クロード・ドビュッシー  
管弦楽のための映像より「イベリア」  
Claude Debussy 《Ibéria》d'Images pour orchestre

# Global Philharmonic Orchestra

グローバル・フィルハーモニック・オーケストラ

1981年、静岡県オペラ協会が主催するオペラ公演への参加のため結成、「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」などを共演した。1984年以降、シンフォニーオーケストラとして年2回の定期演奏会を中心に活動を行っている。モナコ・フランス、オーストリアと2度の海外公演を行ったほか、ヴァイオリン奏者のJ.J.カントロフ氏やソプラノ歌手の故佐藤しのぶ氏、ホルン奏者のフランク・ロイド氏など多彩なソリストとの共演を果たした。創立40年を過ぎて当初50名程度だった団員も100名を超える大所帯となり、ある時は古典派の緻密

な様式美の再現に取り組み、またある時は近現代作曲家の大曲に果敢に立ち向かうが、奏者と聴衆がともに音楽を愉しめる瞬間を創り出すという精神を忘れることなく、日々の取り組みを続けている。年齢も職業もさまざまな、個性豊かな団員を擁するアマチュア・オーケストラである。



◀ 当団ホームページ  
動画を掲載しております  
ご視聴ください

## 第75回 定期演奏会 ご案内

2026年7月5日 (日) 13:30開演 (12:45開場) 【会場】すみだトリフォニーホール 大ホール

指揮: 石川 征太郎 ヴァイオリン: 成田 達輝

〔曲目〕

- ◆ストラヴィンスキー プルチネルラ組曲
- ◆ストラヴィンスキー ヴァイオリン協奏曲 (独奏: 成田達輝)
- ◆ショスタコーヴィチ 交響曲第10番

〔入場料〕 2,000円(全席指定)  
※2026年4月1日チケット発売開始予定  
〔取扱い〕 トリフォニーホールチケットセンター  
TEL.03-5608-1212



◀ チケットのご購入はこちら  
[teket]  
<https://teket.jp/11695/62537>

〔問合せ〕 [globalphil.ad@gmail.com](mailto:globalphil.ad@gmail.com)  
<https://www.globalphil.net/>

※未就学のお子様のご入場はご遠慮ください



## 団長挨拶

本日はご来場頂きまして有難うございます。

今回は指揮者に松尾葉子さんを久しぶりにお迎えし、スペインを題材とした作品を中心にプログラムを組みました。松尾さんには何回か指揮をしていただいておりますが、いつもてきぱきと練習を進め、あっという間にオーケストラを松尾ワールドに引き込んでいきます。そして、サクソフォン協奏曲のソリストには日本を代表するサクソフォン奏者である上野耕平さんに登場していただきます。上野さんはテレビやラジオに頻りに登場されているので、放送を通じて演奏やお話をお聞きになった方も多いのではないのでしょうか。演奏曲はフランス現代の作曲家であるトマジの協奏曲です。抒情的な部分と技巧的な部分がうまく融合した佳品でサクソフォンの魅力をたっぷりとお楽しみいただけたと思います。

その他のオーケストラで演奏する曲はフランスを代表する作曲家である、ビゼー、ラヴェル、ドビュッシーがそれぞれスペインを題材とした作品を取り上げました。詳細は曲目解説に譲りますが、それぞれの作曲家がスペインをどう料理したのかを探索しながらお聴きになってみるのも一興かと思えます。

それでは、最後までごゆっくりお楽しみください。

団長 関根 一臣



指揮  
松尾葉子  
Yoko Matsuo

セントラル愛知交響楽団 特別客演指揮者。

1982年フランスのブザンソン国際指揮者コンクールで女性として史上初、また日本人としては小澤征爾について二人目の優勝という壮挙により、一躍注目を集める。名古屋生まれ。1981年国際ロータリー財団の奨学生としてフランスに留学、パリ・エコールノルマル音楽院指揮科でピエール・デルヴォー氏に師事。1982年帰国後名古屋フィルを指揮し、名古屋デビュー。1983年『若い芽のコンサート』でNHK交響楽団を指揮。2001年ニューヨーク・カーネギーホールにてベートーヴェンの第九を指揮する。平成28年度愛知県芸術文化選奨受賞。トリフォニーホール・ジュニア・オーケストラの音楽監督を兼任。東京藝術大学指揮科教官を30年間務める。2015年4月より愛知県立芸術大学客員教授。アンサンブル・フォルテ指揮者。女声合唱団マドンナ「かきつばた」ディレクター。著者に「指揮者にミュージックが微笑んだ」(2003年論創社)、「指揮者、この瞬間」(2008年樹立社)がある。

公式サイト:yoko-matsuo.com



サクソフォン  
上野耕平  
Kohei Ueno

東京藝術大学器楽科を卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞(史上最年少)。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。現在、国内若手アーティストの中でもトップの位置をしめ、ソリストとしてNHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京都交響楽団 他、国内のほとんどのオーケストラと共演。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会、テレビ「題名のない音楽会」へ出演するなどメディアとの相性も良い。音楽以外にも鉄道と車を愛し、深く追求し続けている。2025年4月16日に6枚目のソロアルバム「eclogue」をリリース。

<https://uenokohei.com>

## お客さまへのお願い

- ◆携帯電話、時計のアラーム等は必ずお切りください。
- ◆私語、お荷物を整理する音など、演奏中に物音が出ませんようご配慮ください。
- ◆演奏中の入退場はご遠慮ください。
- ◆会場内での録画、録音、写真撮影はお断りいたします。
- ◆出演者への花束、プレゼントの受付は停止しておりますのでご了承ください。
- ◆会場内でのマスク着脱はお客さまのご判断に委ねますが、ブラボーなどの声援をされる場合にはマスクの着用を推奨いたします。

## Program Note

### スペインをめぐる音の旅

本日の演奏会は、フランスの作曲家たちが思い描いた「スペイン」をテーマに構成されています。19～20世紀のフランスでは、スペインは情熱、色彩、舞曲の軽快さを象徴する憧れの土地でした。作曲家たちは実際の民謡や舞踏の要素を取り入れつつ、自らの想像力を重ね、鮮やかで詩的な“もう一つのスペイン”を描き出しました。本日のプログラムは、その豊かな表情を音楽で巡る旅となっています。

#### モーリス・ラヴェル

##### 道化師の朝の歌

ラヴェルは母がバスク地方出身で、幼い頃からスペイン文化に親しんでいました。《道化師の朝の歌》はその影響が色濃く表れた作品で、弦のピチカートはギターを思わせ、軽快で跳ねるリズムが舞曲的な明るさを生み出します。道化師が朝の光の中で踊り弾む姿が生き生きと描かれ、中間部の抒情的な陰影が作品に柔らかな深みを加えています。

#### モーリス・ラヴェル

##### 亡き王女のためのパヴァーヌ

16～17世紀のスペインで広まった宮廷舞曲パヴァーヌを、ラヴェルは優美な追憶の音楽として再構築しました。“王女”は架空の存在で、過ぎ去った時代への静かな憧れを象徴しています。オーボエやホルンの古風な旋律に弦の和声に寄り添い、悲しみよりも柔らかな懐古の情が漂います。

#### アンリ・トマジ

##### サクソフォン協奏曲 サクソフォン独奏:上野耕平

トマジは地中海的な明るさと透明感を備えた作風で知られています。この協奏曲では、サクソフォンの歌うような音色と、色彩豊かなオーケストレーションが見事に融合しています。

##### ◆第1楽章

独奏は語りかけるように旋律を紡ぎ、時に叙情、時に軽快な動きを見せます。弦や木管との対話が立体的な響きを生み、サクソフォンの幅広い表情を明確に浮かび上がらせませす

##### ◆第2楽章 “Giration (回転)”

回転するようなリズムを核に、独奏が華やかなパッセージを次々と繰り出します。小さな動機がオーケストラと行き交い、渦を巻くように加速しながら高揚へ向かう、躍動感あふれる楽章です。

#### ジョルジュ・ビゼー

##### 「カルメン」組曲より抜粋

オペラ《カルメン》は、当時としてはきわめて斬新な“写実主義オペラ”として1875年に初演されました。スペイン南部セビリアを舞台に、自由奔放なカルメンと兵士ホセ、闘牛士エスカミーリョが織りなす情熱的な物語が展開します。舞曲的リズム、明快な旋律、民謡風の素材を活かしたオーケストレーションが魅力で、今日では世界でもっとも人気のあるオペラの一つとなっています。ビゼーの死後に編まれた《第1組曲》《第2組曲》では、物語の名場面を器乐的に味わうことができます。

##### ◆闘牛士〔第1組曲〕

歌劇《カルメン》全体の前奏曲。力強い金管が闘牛士の勇気と祝祭の昂りを描きます。

##### ◆前奏曲〔第1組曲〕

作品全体を象徴する「運命の動機」が鋭く提示されます。

##### ◆アラゴネーズ〔第1組曲〕

アラゴン地方の舞曲に由来し、付点リズムが軽快に響きます。

##### ◆ハバネラ〔第2組曲〕

カルメンの有名な歌の器楽版。官能的なリズムが妖しい魅力を放ちます。

##### ◆衛兵の交代〔第2組曲〕

街の活気を生き生きと伝える行進曲風の音楽です。

##### ◆間奏曲〔第1組曲〕

フルートの静かな旋律が、夕暮れの静けさを思わせます。

##### ◆闘牛士の歌〔第2組曲〕

エスカミーリョの堂々たるアリアを華やかに再現します。

##### ◆セギディーリャ〔第1組曲〕

カルメンがホセを誘惑する舞曲。軽やかな三拍子が特徴です。

##### ◆ロマ(ジブシー)の踊り〔第2組曲〕

情熱的なリズムが疾走し、クライマックスを飾ります。

#### クロード・ドビュッシー

##### 管弦楽のための映像より「イベリア」

《イベリア》は管弦楽のための《映像》の中心をなす作品で、作曲者が直接訪れたスペインの印象というより、絵画的・象徴的な“心の中のスペイン”を描いたものです。民謡の引用はほとんどないものの、特有のリズムや音階、光と影の対比が巧みに組み合わせられ、聞き手の目の前に情景が鮮やかに立ち上ります。第2曲と第3曲は連続して演奏され、街の喧騒、夜の香り、祭りの高揚へと、時間と空気が移り変わるように展開します。

##### ◆第1曲「街の道と田舎の道」

ハバネラ風の揺れるリズムが街角のざわめきを映し、歩みを進めると田園の静けさが広がります。明暗の転換が鮮やかで、視界が移ろうように音楽が展開します。

##### ◆第2曲「夜の薫り」

ハーブや木管の柔らかな響きが夕暮れから夜への時間を包みまします。旋律は霧のように立ち現れては溶け、幻想的な静けさが作品全体を支配します。

##### ◆第3曲「朝の門にて」

夜明けとともに祭りの準備が始まり、金管と打楽器が活気ある朝の光景を描きます。舞曲的なエネルギーが全体を満たし、輝かしいフィナーレへと駆け抜けます。

## 最後に

フランスの作曲家たちが描いた多様な“スペイン像”を、踊りのリズム、街のざわめき、夜の香り、祭りの高揚とともに味わうプログラムです。それぞれの作品が異なる色彩と物語を持ち、聴く者を魅惑的な旅へと誘います。どうぞ心ゆくまでお楽しみください。

(ファゴット/藤村伸夫)